
クロックタワー2～闇島～

闇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロックタワー12〜闇島〜

【Nコード】

N4963B

【作者名】

闇夜

【あらすじ】

気が付くと記憶がないまま塔に閉じ込められていた。そこで理由もわからず残虐がおこなわれた。しかし、塔を抜け出してもそこは孤立した島だった。真実をしり、島を抜け出すことができるのか？

序章（前書き）

クロックタワーの続編です。
クロックタワーを読んでから見ることをお勧めします。

序章

気が付けば俺達はここにいた。
窓のない、知らない場所。

ほとんど記憶がなく、なぜここにいるのかなど当然分らない。
でも、冷酷な声のもと、することだけは分かっていた。

それは鍵を探すこと。

少し、人間離れした特色をもつ仲間達と協力し、沢山の犠牲を払って手に入れた鍵。

そして、俺達は光の閉ざされた闇からついに出口ができた。

しかし、扉の先は光などではなかった、また闇が包み込んでいた。

密室のタワーから抜け出した先は、孤立した島だった。

鬱蒼とした森林がおさら俺の心を不安にさせた。

けれど、絶望のがけっぷちで俺は光を見つけた。

それはとても近くにあった。

いつも傍にいた。

俺の希望は、今、両脇にいる二人の女。

一人は雪のように白くて柔らかとした子、もう一人はまだ年端も行かぬ子供。

けど、二人は俺の折れかかった心を救った。

何もしなければ何も起きない、歩き出そう、止まったらそこで終わる。

クロックタワー 生存者三名

大幢秀 おおとうしゅう
時冬雪 じとうゆき
樋浦ミカ ひつぷり

第一話 探索

歩き出したはいいが、いったいどこに行って、何をすればよいかわからなかった。

取りあえず、小学生のミカのペースにあわせて丘を下ることにした。森の中には、もちろん整備された道はなく、獣道をくだっていった。獣道というんだから、そのには大小さまざまな動物の足跡が刻まれていた。

そこには、見たことのない、というか、絶対にありえない形をした足跡まである。

疑問に思ったが道を進んでいくうちに頭からすっかり抜けていった。それもそのはず、ごつごつした石や腐葉土などで足場が悪い。

だから小学生のミカに手を差し伸べながらも、一つしたの女―雪にも男の秀手を貸さなければならなかったからだ。

そんなこんなで、どれくらい時間がたっただろうか。

忌々しい思い出残る塔がだいぶ遠くに見える。

あの塔には、思い出も、疑惑もごまんとある。なぜ記憶がほとんどないのか？なぜあそこに居たのか？目的はなにか？

そんなことを思いながら歩いていくと見慣れた足跡があった。

雪やミカは気づいてないようだが、そこにはクツキリと水を含んだ土に痕跡を残していた。間違えなく靴の跡だ。

秀達が来る前に、此処に足跡があるということはこの島に人がいるのかもしれない。

そう思うと秀の心が震えた。

「おい、雪、こっち来てみる。これはとんだ大発見だぞ」

トボトボと歩いた雪が、足を止めて、ミカの手を握って走ってきた。

「なに？どうでもいいことだら怒るわよ！」

そういつて少しふくれつつらをした。険しい道で疲れてるのだろう。

「ほら、これ見てみる、人の足跡だ。」

「ん？ そうだね。だから？」

「だからじゃないだろ！ 俺達以外にも人が居るかも知れないってことだよ」

雪は目を見開いて、右手をグーにして手を打った。

隣のミカも状況がよめたのか、少し嬉しそうに見える。

まだ、生き残れるチャンスがあるかもしれない、この閉ざされた島から。

足跡を追っていくのは簡単ではなかった。

この入り組んだ山だ、足跡が消えたり、だいぶ離れたところで見つかったりと、映画の狩人みたいにくまくは行かなかった。

それにもう太陽が沈みかけている、このペースでは人が居るところまでたどりつけないかも知れない。そんな焦りと不安が心の中で渦巻く。

「キャッ」

突然後ろの方でミカが倒れた。

どうやら、木の根っこに足を取られたようだ。

「大丈夫か？」

秀は慌ててミカの傍による。

不幸中の幸い、かすり傷程度でたいしたことはなかった。

でも、流石にこれ以上探索を続けるのは難しい、そこで秀に一つのアイデアが浮かんだ。

「今日はこれ以上は無理だ。さっき向こうの方に洞窟見たいのを見つけた。そこで今日は休もう。」

雪とミカは二つ返事で賛成し、洞窟に向かうことにした。

だいぶ戻っていくと、木がだいぶ入り組んでいる所にでた。

「ねー、洞窟なんてないじゃん、もう歩けないよー」

雪が不満そうにしゃがみこんでしまった。

「なに言ってるんだよ。この木々の間のところ、洞窟になってるだろ。」

崖に木々が生い茂っていてよくわからないが、よく見ると空洞になっ
ているのがわかる。

たしかに洞窟見たいのがある。と、いっても崖にあながあいたよう
になっているだけ、何かあればすぐに崩れそうだ。

取りあえず中に入ってみると、以外にも広くなっていて自然にでき
たものとは思えなかった。

「本当だ、洞窟みたいになってる」

雪は少し関心したように秀を褒め称えた。

「でも、よくわかったね」

「んー、観察力がいいのかな。なんか洞窟って感じがしたんだよね。
」

秀がそういうと、雪はよくわからないといった表情で奥に向かった。
「すごい、だいぶ奥まで続いてるよ」

雪が洞窟の前にいたときとは違い、子供のような活発な声になった。

「あまり奥まで行かないほうがいいぞ、熊の洞窟かもしれない」

一瞬、雪の肩がビツとゆれてこっちに戻ってきた。

「ハハハハハ、ミカちゃん、あんまり奥にいったらダメだよ」

そういつてごまかした。

とりあえずは今日は此処で寝るしかない。

そんなことを思ったとき、外で獣のような咆哮が響いた。

第二話 獣（前書き）

グロテスクな表現も含まれています。

第二話 獣

獣の咆哮がなると同時に、秀は雪とミカに此処にいるように合図を送った。

雪たちは分かったとコクリツと頷く。

それを確認して秀は洞窟から外へ出た。

外はもう真っ暗で、ほとんど何も見えない。

森の夜は予想以上に不気味で、闇に敏感になる。

秀は肌寒いなか、小枝の散らばる道を進む。

足場は悪いが、来た道よりは歩きやすかった。

しばらくすると、また獣の咆哮が鳴り響いた。

その声にビクリとしながら秀は進んだ。

すると前方に黒い影があるのを見つけた。

秀は恐怖と期待で走り出した。

小石が邪魔をして、何度も転びそうになったが、秀は止まらなかった。

―人間かもしれない、逃げる方法を知っているかも

もはや恐怖など忘れて期待が胸を埋めつくした。

しかし、その理想はガラスのごとく砕け散った。

その黒い影は人ではなかった。

クロコダイルのように爬虫類を思わせる、うろこのついた肌。

顔の方は四つに割れていて、小さい牙みたいのがびっしりについている。

その口（？）の中には血がびっしりとこべりついていていた。

爪の生えた手足にも、血がついている。

秀は恐る恐る近づくとも人間の残骸が散らばっている。

体のどの部分とも分からぬ臓器みたいなのが回りに飛び散っている。

怪物は、ほとんど原型をとどめていない体から首から上のものをもぎ取る。

そして、ぐちゃと軽い音をたてて怪物はそれを食べ始めた。
秀は恐くなり一步引いた。そのとき

パキッ

足元で聞き覚えのある音がした。

小枝を踏んでいた。

秀はさっと怪物の方を見上げる。

でも、そこには怪物はいなかった。

跡形もなく消えていた。

もういなくなったのだろうと秀は一安心した。

急いで雪たちのもとに逃げようと振り返ったとき目の前をさえぎる
ものがあつた。

秀は顔をあげる。

目の前に、大きく広げられた血のしたたる怪物の口があつた。

秀は絶望した。

第三話 生き残り

怪物が血の滴る口を秀に襲い掛かえろうとする。しゃがみこんだまま体が緊張してうごかない。

秀は目をつぶって死を覚悟した。

そしてまさに、怪物が秀を頭から包みこもうとした、その瞬間

ダッダッダッダッダッ

銃声と共に怪物の悲鳴が聞こえた。

秀は恐る恐る強くつぶったまぶたを開く。

目の前に怪物はいなく、脇の方で緑の液体を体内から流して横たわっていた。

すぐさま、銃声のしたほうを見ると、そこには二十五歳ぐらいの男が短機関銃をもってたっていた。

秀はつい歓喜に胸おどった。

その男は、アメリカの特殊火器戦術部隊みたいな格好をしており、短機関銃のほかにくつか武器みたいのが見て取れる。

男は秀に近づき手を差し伸べて立たせる。

「まだ、生きてる人間がいたとはな」

男は少し驚いたように秀をまじまじと見る。

「あんた、どこの課だい？」

「え……あっ……」

秀は突然の、意味不明の質問に戸惑ってしまった。何が言いたいのかわからないのだ。

「いや、言いたくないのなら別にいいが。それより、ここら辺で人を見なかったか？」

「ひょっとして、あれですか？」

秀は怪物にやられた、無残な肉の塊を指差す。

男は様子を見に行く。

「ちっ、山崎が死ぬなんて、生物課はいったい何が作りたかったんだよ。」

ショックをうけたの男はかなり取り乱れていた。

「生物課ってなんですか？」

秀はふと気になるワードが出たので尋ねてみた。

「お前、知らないのか？あの怪物つくったのは生物課のやろうだぜ」まだ怒りがおさまらないのか少し声に怒気がふくまれていた。

「いや、そういうじゃなくて、生物課ってなんなんですか？ってかここはどこなんですか？なんで俺が此処にいるんですか？」

「お前ひよっとして、記憶がないのか？」

あっけに取られたように男は普通の声に戻った。

「・・・・・・はい」

「そうか、抜け出すときに何かさせたんだな」

男は真剣な顔をして考えこんだ。

「んゝそうだな、まずは此処は危険だから俺達が隠れてるところに来い、話はそれからだ。」

「はい、でも、まだ森の奥に仲間がいるんです。」

すると、また男は考え始めた。

「ここら辺は、あの怪物が巣くっていて危険なんだ。弾の無駄使いも避けたい。此処から近いのか？」

「はい、十分ぐらいでいけます。」

「そうか、じゃあいこう。」

「はい・・・・・・えゝと・・・・・・」

くろがね
「鉄だ。鉄哲」
おわとう しげる

「大幢秀です。鉄さん、よろしくおねがいます。」

「まかせときなこれでも戦闘には慣れている。」

そうして、秀と鉄は洞窟にむかった。

第四話 打倒

月明かりが反射して周りをぼんやりと照らす洞窟。

秀が出て行ってどれくらい経っただろうか？

雪は入り口近くでミカとしゃがみこみ秀の無事を祈っていた。

もうかなりの時間が経った。

雪の脳裏では、少しよからぬことがチラつき始める。

「ねえ、お兄ちゃん遅いよ」

傍でミカが不安そうな声を出す。

「大丈夫、心配要らない。」

雪は自分に言い聞かすようにボソリといった。

そんなとき、外で銃声が鳴り響く。

雪はそれを聞き、不安の一字がうかぶと、ミカをつれて洞窟から出た。

辺りは真っ暗でほとんど見えない。

取り合えず雪はひたすらに走った、といってもミカがいるのでそれほど速くは走れなかった。

すると、途中で後ろから誰かがつけるようにくるのが分かった。

雪は秀だと思い、後ろに戻ろうとする。

「だめ！」

いきなりミカが雪の腕を強くつかんで言い出す。

足はしっかりと地面に踏みしめていて、此処を動く意志がないことを告げる。

「何でだめなの？ 秀かもしれないよ？」

雪はなるべく怖がらせないように優しい声で対応する。

「お兄ちゃんじゃない気がするの、お姉ちゃんには逝って欲しくないの」

ミカは瞳を潤ませて言う。

そんなことをしてる間にも、後ろの方ではもくもくと何かが追いか

けてくる。

ミカはじれったくなつたのか、雪の手を引いて走り始めた。動いたのに気づいたのか、後ろの方もさつきより早足になっている。雪は意味の分からず、唯ミカの手に引かれてるだけだった。

でも、まだ小学生のミカには限界がある。

走る速度も遅いし、雪を引く手も弱弱しくなってきた。

そんなこんなで、徐々に体力もなくなりほとんど歩いている状態になった。

そのとき、草陰から何かが飛び出してきた。

飛び出して来たものは秀でも人ですらなかった。

そのにいるのは、巨大なカンガルー。

カンガルूといっても二メートルはゆうに越えているだろうか。

その巨大カンガル―は威嚇するように前足を大きく広げる。腕ほうには尋常とは思えない二、三十センチはあるであろう爪が伸びてい

巨大なカンガル―はやけに発達した前足で歩みよってくる。

そして、雪とミカに鋭い爪を向けて襲い掛かろうとする。

「いやああああああああああああああああああ」

雪は白い顔を恐怖一色にして叫ぶ。

けれど、その生物は雪の目の前に頭を吹き飛ばされた。

木っ端に陣に、頭のプロ型をとどめることなく、赤い血を首からよだれのように流す。

雪はいつたいたなにかさっぱり分からなかった。しかし

「雪、ミカ大丈夫か？」

その秀の声を聞き、ようやく自体が把握できた。

秀の後ろには銃を持った男の人がいたのだ。

雪はしばらく呆然としていたが、ゆっくりと口を開く。

「秀、あの人は？あの生物は？」

「安心しろ、鉄さんは見方だ。まだこの島に人がいたんだよ。」

ミカは雪に隠れるようにしていたが秀の傍にいく。

「プロコプトドンでよかったな、もつとでかい生物だったら死んだかもしれない。」

いきなり鉄が言い出した。

「鉄さん、プロコプトドンってなんですか？」

「前もいったように生物課の実験体だ。こいつは古代の生物らしく、昔、生物課の方で『初めて古代の生物の誕生に成功させた』とか騒いでたから確かだ。」

雪はききなれない単語だったかで困り果てた顔をする。

でも、取りあえず今生きてることにホッと胸をなでおろす

第五話 進行

ある程度の話をすると、秀達は鉄の仲間がいるところへと向かった。話によると秀達は、もともと時計のある塔―通称クロックタワーで働いていた人らしい。

その後はいろいろ複雑なのであとで話すらしい。

それで雪たちを納得させ、鉄を先頭に仲間がいるというその場にむかう。

もう日が昇っている。

怪物のはびこる島で、一夜が明けた。

生きるか死ぬか、そんな生活に慣れることはない。いまだに秀達は、恐怖と混沌のなかでさまよっている。

深い森も鉄が切り分けるのでさほど辛くはなかった。

一回秀達を通った足場の悪い道を通して、どんどん先に進んでいく。

しばらく行くと森は終わり、野原みたいになってるところに出た。

唯だだっぴろい野原だ。その分、森の緑とは違い、若々しい薄い緑が疲れた精神を和らげる。

「この先に朽ちた村がある。そこに俺達の仲間がいる。」

鉄が少し疲れた表情をみせながらいう。

日が昇ってからもうだいぶ歩いた、それに草を切り分けて歩いていたのだ、鉄の表情に疲れが見えないほうがおかしい。

「鉄さん、ちょっと休みませんか？」

気をつかったのか雪が言い出した。

「私達……もう……歩けない」

雪はミカとお互いを支えあうようにして、息を絶え絶え言い放つ。別に気を使ったわけではなさそうだ。

「そうだな、ここで少しやすもうか。」

疲れた鉄は雪の意見に同意した。

そうして四人は日陰になるようなところを探し、円になるように座り込んだ。

「鉄さん、仲間って何人いるんですか？」

秀が尋ねると鉄は指をおり、仲間の数を数える。

「えー、今は俺を含めても六人しかない。始めは沢山いたんだけど、殺^やられちゃった。」

鉄は苦笑を浮かべる。

「あつ、そういえば君達はいったい、今までどこにいたんだ？」

鉄は思いついたように聞いてくる。

でも、秀たちには何もこたえることができなかった。

しばらくだっまっていて、鉄もそれをさっしたのか「言いたくないならいいよ」と声をかけた。

しばらく四人はそこで雑談をしていた。

でも時間を無駄にするのはもったいないので、鉄が「行こうと」と促した。

それから、何時間か歩いた。

すると明かりがともった滅びた家々が見えてきた。

此処が鉄が言う仲間がいるところらしい。

ここで抜け出す方法が分かるかもしれない。

第六話 違法

村に着くと鉄が秀達を古い家に導く。

秀たちはされるがまま、鉄のもとについてゆく。

家の中はよそうに反して以外にも綺麗で、整頓されてあった。

入って真っ直ぐ言ったところに大きな丸テーブルがありそこに一人座っていた。

「よっ、柎ひぐらぎ」

鉄は椅子に座っていた女性に話かける。歳は二十代後半といったところだろうか、長い髪を一束に後ろでまとめている。

「えっ？まだ人間がいたの？」

柎と呼ばれた女性は目を丸くして驚く。

「ああ、説明するからみんな集めてくれ。」

「分かった。」

そういうと彼女は何処かに消えていった。

数分が経ち彼女は何人かの人間を連れて戻ってきた。

そして、丸テーブルに座ると自己紹介などが行われた。

「なんだって？君達は記憶がないのか？」

ちよっと太り気味のめがねの青年がいう。この人の名前は黒崎晴雄くろさきはるお機械課で働いてたらしい。

言い忘れていたが此処に居る人も、全員クロックタワーで働いていた人らしい。そして役職にはいくつかの課に分かれてるらしい。

でも、まだなぜ今の状況なのかは話していない。

「シヨックで一時的に記憶を損失することがわよ」

そういったのはさっきの柎と呼ばれた人、本名は柎まど香、人体課というところに所属してたらしい。

「じゃあ、すぐに治るってことですね、先輩！」

そういって、いきなり喜びだしたのは芹澤斎せりざわいづき、柎と同じ人体課の人

である。見た目も、精神的にも幼く見える彼女は今年で二十三だという。

「でも、精神的ショックはなかなか治らないんじゃないのか？」
そういったたくましい男は今井真也、鉄と同じく雇われ兵だったらしい。同じ用は服を着ているが短機関銃はもっていなかった。

こんな感じで秀達を置いてけぼりに、この人たちは討論を始めた。でも、秀にはどうしてもしりたい事があった。

「あのー、ちょっといいですか？」

秀が大声で言い放つとみんなだまった。

「その、よろしければなんでこんなことになっているのか教えてくれません。」

「みんなよくわからないの、いきなり機械や実験体の暴走がはじまったの。」

一言柊がそういうとみんな下を見てうつむいた。

しかし、その沈黙を破ったのはここにいるひとではなく、新たな人物だった。

扉から一人の老人が入ってきた、老人といってもまだ五十くらいだろう。

その老人は秀達をみていった。

「大幢、生きていたの！」

秀はビクツとした。

「なんでこの人は俺の名前を知ってんだ、ひよつとして……」

「あの……えっ」

しかし秀は老人が驚いているだけじゃなく、恐怖しているようにみえて、話すのをやめた。

「あつ、一条さん。こいつら記憶がないんですよ。なんか見覚えありません？」

と鉄。

しかし、秀は一条という人が記憶がないと聞いて安心して見えるようにみえた。

「ああ、知ってるよ。俺の部下だ。そっちのお姉ちゃんも下で見かけたことがある。」

「下ってなんですか？」

「んー、クロックタワーには下と上があり、下では違法行為が行われてたんだ。まあ、上の人は下の存在など知らされてなかっただろう。でも、もうどうでもいいことだ。」

「ということは、俺達は違法行為をしてたんですか？」

「そういうことになるな」

秀は少しショックをうけたがそれより知りたいことがあった。この人なら知っているかもしれない。

「何でこんなことになってるんですか？その違法行為が何か関係してるんですか」

すると一条はしばらく黙った、でも重い口をひらく

「お前達にはしるけんりがあるな」

第七話 希望

一条と名乗った男は丸テーブルに座り、みんなが聞こえるように大きな声で話し始めた。

「さっき言ったとおり下では違法実験が行われていたんだ。そしてあるとき、ある人体実験を試みたんだ。しかし、それは失敗に終わった、いや、成功といえば成功だったんだが、作り出されたものはあまりにも危険だった。それで、処分すべきか議論が行われた。両者一步も引かなかったよ、世界がひっくりかえるようなことだったからな。」

「それで、どうなったんですか？」

秀がたずねると一条の目は少し曇り、また話し始めた。

「次第に討論は激化した。そして誰かがA R I S Uを暴走させたのだ。」

「A R I S Uってなんですか？」

「そうか、覚えていないんだな。A R I S Uとはクロックタワーの全機械システムをつかさどるマザーコンピューターだよ。どうやら暴走したA R I S Uは機械を使ってすべての人間を殺そうとしている。」

「そ、そんな………」

雪は絶句する。

「一条さん、俺たちが助かる方法はないんですか？」

「………ないな。」

「そんな。」

「でも、もう一度、クロックタワーに入れば何とかなるかもしれない。でも、あそこの扉はしっかりと鍵がかかっていて入るのは不可能だな。」

そのとき秀たちの目が光った。

「一条さん、クロックタワーに入ればいいんですね。」

「ああ、そうだが」

「なら大丈夫です、クロックタワーの扉なら俺たちが開けましたから。」

「どういふことだ！説明してくれ」

「俺たちはじめはクロックタワーの中にいたんです。それで・・・・いろいろなあつて・・・・抜け出てきたんです。」

「そんな、ありえないARISUのシステムは完璧のはず、多少遊んだとしても必ず抹殺されるようになっていたはずだ。」

一条は必死に熱弁した。

「とりあえず俺たちは脱出できるのか？」

鉄が希望に満ちた、はきはきとした声でたずねる。

「まあ、そういうことになるが・・・・なぜ？」

そのとき一条は雪に隠れるようにしていたミカをみつけた。

「そ、その少女はなんだ！」

「え、ミカちゃんですか？ミカちゃんは私たちと一緒にクロックタワーにいたんです。」

一条は首をかしげて考え始めた。

そして思いついたように手をたたくとぼそりといった。

「ARISUにも予想できない、不確定要素があったということか。」

「え、何ですか？」

あまりにも小さい声だったので秀はたずね返した。

「気にするな、とりあえず助かる方法が見つかったんだ。今すぐ出発するぞ」

その掛け声と共に、みんな立ち上がった。

第七話 希望（後書き）

返信が遅れてすみません。
でも、一段落ついたのでどんどん書いてきます。

第八話 因果

俺たちはすぐに家を出て丘に向かった。

外はもうだいぶ暗くなっていたが、ぼんやりとあたりが分かる程度だ。

鉄と今井を先頭に、どんどん森の中に入っていく。

森の中ではやっぱり、獣の咆哮、飛び立つ鳥の音などが聞こえてくる。

「先輩、なんだか気味悪いです。」

芹澤が柵の腕に抱きつくように、情けない声を漏らす。

「放せ、芹澤、お前二十五だろ！」

「そんなこと言われても」

そんなやり取りを聞きながら一同はどんどん進んでいく。

どのくらい行っただろうか、だいぶ日が暮れてきた。

そのとき、森からごそごそと音がした。

どうせまた、カンガルーやワニもどきだろうと思い、鉄と今井は銃を構えた。

でも、しばらくしても音のするほうからは何も出てこない。

「気のせいかな」

今井がそういつて銃をおろした瞬間、森の中から大きなトカゲみたいな顔が出てきた。

その顔は今井の上半身をすっかり捕らえ、鋭い歯で噛み千切った。

今井の脊柱の見た下半身は血しぶきを上げ、ゆらゆらと揺れてからその場に倒れる。

顔だけの怪物は今井の上半身を噛み殺し、血を滴らせている。

次の瞬間には頭だけの怪物は、森から姿を現した。

身長約5メートル、二足歩行の巨大なトカゲ。

そう、そこに現れたのは絶滅したはずの恐竜そのものだった。

「そ、そんな……あれは……」

黒崎が絶句し、顔が白くなっていく。
その間に鉄は、恐竜に銃弾を打ち込む。
怯みはしたものの、まったく聞かないというように一声叫ぶ。

キヤイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

少し、機械音に似た恐竜の遠吠えは全身をすくみ上げた。

「そいつに、銃なんてものは効かない、早く逃げるんだ。」

黒崎はそういつて、さっさと行ってしまった。

みんなもそれに続いた。

しかし、後ろからはドスドスと恐竜が追ってくるのが分かった。
もう絶対絶命のピンチ、とりあえず秀たちは走れるだけ走った。
すると秀が見つけた洞窟を見つけた。

「みんな、こっちです。」

そういつて秀は先人をきって洞窟に入っていく。

後から、ぞろぞろとほかの人も来た。

「黒崎さん、何か知っていることがあるなら話してください！」

秀は少し怖い目つきで、黒崎を睨みつける。

「わ、分かっている、別に隠してるわけじゃないんだ。」

「それで」

「あ、あれはうちの課が作ったものなんだ。」

すると柊から反論の声が聞こえる。

「貴方、機械課でしょ。あんな生物を……まさか」

「そうだよ、あれは我が機械課のリーダー和田慎二の最高傑作、機械のT-Rexだよ。俺たちはTRXと呼んでるけどな。だから銃なんてものは効かない」

一同から嘆くような声が聞こえる。

しかし、秀たちには別に驚く点があった。

「あの、和田さんって……」

「君たち、和田開発部長をしっているのか？」

「いや、その……クロックタワーにいたとき、一緒にいたんです。」

「それで、和田部長はどうなったんです？」

「え！そ、その……」

「まさか、そ、そんな、和田部長が」

そういつて黒崎は泣き崩れた。

「あの人、すごい和田って人と仲良かったから。」

芹澤が補足をいれる。

「なんだか、秀は罪悪感を感じた。」

生きるには、人に屍を超えていかなくてはならない。クロックタワーで学んだはずのことなのに、どうしようもなく悲しくなった。

第九話 飛ぶもの導かれるもの

とりあえず、秀たちはこの洞窟にしばらく身を潜めることにした。はじめは恐竜がうろつく音が聞こえていたが、次第にそれも遠ざかった。

「もう大丈夫なんじゃないか？」

鉄が尋ねる。

「そうですね、一刻もはやくクロックタワーに着かないと。」

そういつて秀は洞窟を抜けだす。

どうやら恐竜はいないようだ。このまま速効でいけば望みはある。一同進み始めた。

しばらくすると丘に続く崖のようなところに出た。

「この先にクロックタワーがあるはずじゃ。」

一条が何気なく説明する。

この道はかなり険しかったので、ミカは鉄におぶられて上った。

ゴツゴツした岩場が何度も足をとる。

「痛った〜」

唐突に雪の悲鳴が聞こえた。

「どうした、雪？」

雪はその場にしゃがみこんでいた。

「前に転んだ時の傷が悪化したみたい」

そういうと、秀は何も言わず雪の足を見る。

前は擦り傷程度の傷が、今は真っ赤にはれ、血がにじみ出てきている。

でも、秀にはどうすることもできず、あたふたしていると隣に芹澤がきた。

「私に見せてください、これでも人体課ですから。」

そういうと、傷の様子を見たり、バックから何か道具を取りだして

手当てをしている。

「芹澤さん、それは何ですか？」

「葉草です。私、結構こういうのにも詳しいんですよ。」
確かに、芹澤の手つきは慣れたものだった。

傷が治ると遅れていた秀、雪、芹澤は急いで先に行った人たちを追う。

しばらく行くとみんなが立ち止まっていた。

一瞬、秀は待っていたのかとありがたく思ったが次の瞬間にすべてを理解した。

みんなの前方にあの恐竜がいたのだ。

クロックタワーは目の前だというのに、恐竜が邪魔をする。

おそらく待ち伏せをしていたのだろう、機械だからそのような知識もあるはずだ。

みんな、恐竜を目の前に恐怖していると、恐竜の目のあたりに石の
ようなものが当たる。

恐竜はまっさきにみんなとは逆方向を向く。

その先には黒崎が立っていた。

「おいRTX、俺はお前の親のようなもんだ。壊されたくないやこ
っちにくるんだ！」

すると、恐竜は真っ先に黒崎のほうへ突進していった。

みんなは、黒崎に何か作戦があるのだろうと、ドキドキと心臓を脈
打たせていた。

そして恐竜は黒崎に襲いかかろうと大きな口をあける。

その瞬間、黒崎は崖から飛んだ。

すると行きよいあまった恐竜も黒崎と供に落ちていった。

黒崎は自殺を選んだのだ。

仲間を助けるためか、和田が死んだと分かったためか、そんなこと
同でもいいが。

秀たちはクロックタワーの目の前に来た。

第十話 ARI SU

秀たちは早速クロックタワーの中に入った。

相変わず、うす気味悪く、三人にとってはとても不快な思いなさせる。

鉄の背中から下ろされたミカが秀に近づいてくる。

「お兄ちゃん、ここに居たくない。」

そういうと、ミカは秀の腕にすがりついた。

一方、雪は帰る方法を探すため努力をしている。

「一条さん、クロックタワーの中に入りましたけど、どうやってこの島から逃げ出すんですか？」

「ああ、任せろ、この下に船があるはずだ。あの伝説の船だよ。」

「伝説の船って？」

雪が首をかしげて尋ねる。

「戦艦大和じゃよ。46インチ砲を携えた最強の船。下のほうで確か作っていたはずだ。」

それを聞いてみんな飛び上がるように喜んだ。

「でも、どうやって下に行くんですか？」

「わしのカードキーがある。本当は君たちもカードキーがあるはずなんじゃがな。」

そういつて一条は階段の影になっているところに向かった。

その壁にはカードを読み取る機械はあるが、その先に扉はない。

そんなことは、お構いなしに一条はカードを機械に入れる。

すると塔のちょうど中心が、蟻地獄のようにへこみ、螺旋階段ができる。

みんなは、一条を先頭に螺旋階段を降りる。

あたりは薄暗くてよく見えない。

階段に一定間隔で並べられたろうそくが唯一の明かりとなる。

「不気味だな。」

秀の前にいた鉄が、誰に言うでもなくつぶやく。

2、3分もしたところに一枚の薄汚れた扉の前に出た。

一条はそれをおもむろにあける。

目の前にはしたいの山が広がっていた。

腕が無いもの、頭が無いもの、すでに原型をとどめてないものまで、さまざまな死体が無残に散らばっていた。

それをみて、一同顔をしかめる。

「ひどい」

少し涙声になった雪の声が聞こえる。

まさにそのときだった、秀、雪、ミカにとっては戦慄を促すような声が聞こえた。

ギギーガッガッ

ようこそ、クロックタワーへ貴方たちにもゲームをしてもらいます。
今度は、増え鬼をしましょう。

これで少女の声はとまった。

「ARISU」

すうとくぐもった一条の声が聞こえた。

あれがARISUか……

走馬灯のように、秀の頭で記憶がよみがえり、混乱させた。

第十一話 壁

A R I S Uの声がやみ、しばらく沈黙が部屋を支配した。

そして、何も言わず秀の後ろで誰かが立ち上がった。

秀は反射的に後ろを振り返る。

そこに、いたのは首のない死体だった。

その死体がよくよくと近づいてくる。

「な、何だこいつら！」

鉄が叫び、必死で銃で抵抗するがやつらの行動はとまらない。

「とりあえず、この部屋から抜け出しましょう。」

そういつて、柵が扉を開ける。

みんなが、入ってくると扉を近くにあった机などで固定し、死体が入ってこれないようにした。

「なんなんだ、あいつら。死んでんじゃないのかよ！」

鉄がいきり立つ。

「一条さん、なにか知っていることがあるんじゃないですか？」

秀が厳しく問いつめる。

「んー、まだはつきりとしたことは分からないが、確かしたでは寄生虫の実験をしていたはずだ。敵陣に寄生虫をばら撒き、体力を奪うためだ。」

「それで、どうなったんです。」

「実験は失敗した。寄生虫が取り付いたものは一瞬にして死んだ。

けど、寄生虫が人間の体を支配して、死んでも寄生虫が生きてる限り、動き出すようになった。」

「じゃあ、体にいる寄生虫を殺せば、死体は力を失うんですね。」

「そういうことになるかな。」

一条は真剣な顔で考え始めた。

「でも、何処に寄生虫がいるのかは、まだ分かってないんじゃないよ。」
「そんな〜」

「とりあえず、死体を避けて、船にたどり着けばいいんだ。」

そういつてみんな、あたりを探索し始めた。

死体が閉じ込めてある部屋からは、ドスドスと扉をたたく音がする。

「お兄ちゃん、扉が開く」

秀の腕に抱きついていたミカがぼそりといった。

そして次の瞬間に机がはじき飛ばされ、扉が開かれた。

のろのろとした動きだが、死体がこっちへ向かってくる。

「やばい、扉が開いた。」

秀は大声で叫ぶ。

それとほぼ同時に雪のこれが聞こえた。

「ここから、下にいきますよ。」

みんなは、雪が見つけた扉を出て、階段を折降りる。

下にも、したいが山のようにあった。

取り合えず、秀たちは死体がないまっすぐの道を進む。

みんな、必死に走った。

まさにそのときだった、雪の後ろにいきなり壁ができた。

被害は出なかったものの、二つのグループに分かれた。

前には秀、雪、ミカ、一条、鉄。

後ろのほうには柊、芹澤と壁で仕切られた。

「柊さん、芹澤さん」

秀が大声で叫ぶが返事はない。壁は結構厚いのだろう。

鉄が銃を撃っても反応はない。

「仕方ない、あきらめて先に行くぞ。」

そんな一条の声が聞こえた。

「置いては行けない。」

みんな反論したがどうしようもなかった。

とりあえず、秀たちは前に進んだ。

第十二話 真実

柊はあきらめずに、扉をひたすらたたいていた。

「開けて、みんなそこにいるんでしょ？」

でもその声は、聞こえることなく、無残に壁に吸収されていた。

「先輩、死体がたくさん着ますよ」

柊はさつと後ろを振り返る。

「もう駄目ね、ほかの出口を見つけるわよ。」

そういつて近くにある扉を片っ端から開けた。

「先輩ここなんてどうです。」

二人は部屋の中に入り、しっかり扉を固定する。

部屋の中は、さまざまな武器が置いてあった。

「すごいですね、先輩」

「護身用に貰っておきましょう。」

そういつて二人とも銃を手取る。

そのとき、奥のほうでうめくような声がした。

二人はビクッと肩を揺らし、銃を構えて音のしたほうに歩み寄る。

「動くな！」

柊はそういつて物陰に銃を突きつける。

でも、そこにいたのは、白衣を着た中年のおじさんだった。

「貴方は？」

柊が尋ねても返事は返ってこない。ただ、うめき声を上げるだけだ。

「先輩、どいてください。きっと毒でも飲んだんですよ。」

そういつて、芹澤はバックから薬草を取り出し、調合し始めた。

それで、できた粉をおじさんの口に含ませる。

しばらくすると、おじさんの呼吸も落ち着いてきて、話せるようになった。

「ありがとう、君たちは、いったい？」

「私たちは上で働いていたものよ。一条さんとこの地下にある船を

捜してるの。」

「い、一条、あいつが生きてるのか？」

おじさんはやけに慌てた様子で立ち上がる。

「もちろんですよ。」

「一条を殺せ、あいつのせいでこんな目にあってるんだ。一条を殺せ。」

「どういう意味ですか？」

「お前たち、実験のことは知っているか。」

二人とも首を立てにふる。

「なら、話は早い、実験では幼い子供が使われたのだ。脳の実験だったから子供が適任だったのだ。でも、俺たちはとんでもない間違いをしていたんだ。子供は脳の使っていない部分を使うことができ、未来が見えるようになった。」

「それで？」

「でも、所詮はこども。人に会うと死ぬ時間、死ぬ場所、死ぬ理由を言って回った。そこで一条は子供を殺すように命令した。しかし、これもまた子供。周りから同情されて殺すのは反対された。」

「分かりました。それで一条さんはARISUを暴走させ、皆殺しにしようとしたんですね。」

いきなり芹澤が割ってはいる。

いいところを取られたおじさんは不満そうだった。でも、次第にその顔が青ざめていく。

「どうしました？」

柊が肩を揺さぶる。

そして次の瞬間、柊の首筋におじさんが噛み付いてきた。

柊の首から大量の血が噴出す。そのどす黒い血が芹澤の顔面に降り注ぐ。

芹澤はとっさに銃を構える。

バン、バン、バン

はじめの二発をくらっても、特に反応は示さなかった。

でも最後の三発目、見事におじさんの心臓に直撃、その瞬間おじさんは空気が抜けた風船のように倒れこんだ。

——寄生虫は心臓にいるの？

そんなことを思う。

——それよりも早く一条さんのことをみんなに伝えないと

そう思って立ち上がり、扉に手をかけたその刹那、背後に気配を感じる。

芹澤は銃を構え、後ろ振り返る。

そこには柊が立っていた。確かに、血の気のない顔でよろよろとこっちに近づいてくる。

「そ、そんな、先輩」

寄生虫はどうやら感染するらしい。どういう経路を通して感染するかは分からないが芹澤は、その真実を知り、足がすくんだ。

第十三話 思い出

秀たちはまっすぐ進んでいた。

一条に導かれるまま、何も考えずに進む。

先には階段があり、大理石の大きな広間にでた。

「一条さん、ここは何処なんですか？」

「ここは、一般に言う休憩所みたいところかな。」

休憩所の上にはシャンデリアが並べてあり、とても地下だとは思えなかった。

「すごいッスね、ここ。」

鉄が嘆称の声が聞こえる。

「俺も、こんなところにいなけりゃ、今頃はアイツとこんな家に住もうとか、放してたんだろうな。」

「鉄さん、奥さんでもいたんですか？」

雪がそっとたずねる。

「そんなじゃねえよ。婚約した人がいるんだ、俺とおんなじ雇われ兵だよ。女だったのに運動神経抜群でよ、まだ若いのに軍の特殊部隊にいたって経歴があって。」

「すごいですね。」

「そうだろ、きつと弥生ならうまくここを抜け出したてるさ。」

「や、弥生さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・！」

「しってるのか？」

鉄はびっくりしたように雪に顔を近づける。

ここで雪は真実を言うべきか迷った。黒崎のように泣き崩れて、しまいには自殺してしまうのではないかと思ったからだ。

「いえ、わかりません。」

雪はひとことそういった。

下に行く道が見つかったのだろう。

秀が手招きをして雪たちを誘う。

二人はそれに答え、秀のほうに向かった。

まさにその刹那、違う扉が開き、動く死体が襲い掛かってきた。

鉄は自慢の銃をぶっ放すが、あまり効果はない。

それをみて雪の頭にふと、ある考えが浮かんだ。

——上半身がないやつは動いてない、でも顔を打っても死なない、上半身の顔以外の急所……！

「鉄さん、心臓です。心臓を狙ってください。」

鉄は言われたとおりに心臓を狙う。

すると、緑の液体をたらし、死体は次々に倒れていった。

そうやって行くうちに、だいぶ数が減ってきた。

「雪、鉄さん、いまです。早くこっちに。」

秀の声を聞き雪たちは走る。

扉の目のまえに來たぐらいだろうか。上から何かが落ちてきた。

それは大きな毛の塊だった。

しかしそれがたちあがる。大きな翼を広げて正体を現した。

鳥のような足、全身毛に包まれたからだ、大きな翼、角のある頭。

その奇妙な生物は、雪たちを扉に近づけさせまいと、立ちほだかった。

鉄は銃を乱射。しかし、効果はなし。

次の瞬間には大きな翼をはためかせ、腕のつめで、雪に襲いかかってきた。

雪は目をつぶる。もう駄目だと思った。しかし、一向にいたにはこない。

恐る恐る目を開けると、鉄が雪の盾になっていた。

怪物のつめは鉄の腹部に食い込み、わけの分らないものをたらしめている。

「早く行け、今すぐ下にいくんだ。」

雪はそれを聞き、迷ったすえ、秀たちと供に下へ降りていった。

鉄は最後の力を振り絞って、右ポケットを探る。

取り出したのは手榴弾だった。

それに気づいた怪物は慌ててはなれようとするが、爪は刺さったまま抜けなかった。

そして、地下が揺れた。

第十四話 鬼気

秀たちはどんどん、下に降りていった。

はじめはたくさんいた仲間も、今じゃ秀、雪、ミカ、一条しかない。

そんなことは、なるべく考えないようにして、降りていく。

地下の階段は相変わらず、明かりが乏しく、暗い道を進んだ。

後ろからは動く死体が迫ってくる。

緩慢な足音を響かせ近づいてくるのがわかる。

しばらく行くと、また別の部屋に出た。

ガラス張りの実験室がいくつもある。

そのガラスも、血でくもり、肉で埋もれている。

「一条さん、ここは？」

「ふー、覚えていないのかね。我々の実験室だよ。」

一条は少し笑みを湛えて言う。

「ここでは、どんな実験を？」

「まあ、もつと先に行ったら話すよ」

そういつてどんどんと歩いていった。

秀は唯その後に続くしかなかった。

「お兄ちゃん」

ミカがか細い声で秀に抱きつく。

「どうした？もうすぐ帰れるぞ。」

「あの人について行っちゃ駄目、大切なものを失うよ。」

「何言ってるんだよミカちゃん。」

秀はミカの忠告を聞くことなく、帰れるという期待が胸を埋め尽くし、思考力をていかさせていた。

この部屋には死体がない。血のあとや肉片はあるのに、死体は一つも転がっていない。

ここで残虐が行われたのは確かだが、その死体は何者かによって全

部削除された。

そしてここは一条の実験室。

昔、この部屋を使っていて、今生きているのは一条と秀だけ。
こんな、簡単な推理も今の秀にはできなかった。

秀たちは唯々諾々と一条に従った。

なにやら大きな扉の前に着いた。

一条はそこで、カードキーを使うと重々しい扉が轟音と共に開く。
出たのは小さな部屋、でもそのガラス張りの窓からは巨大な船が見えた。

「一条さん、これが伝説の船ですか？」

雪が澆刺と聞く。

「ああ、そうだよ。これでやっと救われる。」

そういうが早い、一条は何処からともなく、一丁の銃を取り出した。

「雪くん、君を用はない。でも大幢とミカとかいったかな、君たちにはここで死んでもらう。」

「まだ記憶は戻らないのか、それは好都合だ。じゃあな大幢」

バン

一発の銃声が小さい部屋にこだまする。

秀は目をつぶっていた。

でも、何がなんだか分からない、一向に痛みはこない。
これが死というものなのか？

でも、確かに意識がある。そう、生きている。

秀は目を見開く。

そして、周りの光景をみて絶句した。

床に雪が腹部からドクドクと血を流しながら倒れていた。

第十五話 銃声

秀は目の前の光景を信じられず、どうしようもなかった。一条を睨むように見つめても、何も解決しない。

秀はしゃがみこみ、雪を抱き抱える。

「大丈夫か？雪」

「ごめん秀、もう無理だよ。」

そういつて雪はよりいつそう顔を白くして、ぐったりと首をたらす。

「な、な、何でだよ……………」

秀は目から淡い液体を流し、雪の胸にうづくまる。

「もう、別れはすんだけね。これで私もやっと肩の荷がおりる。」

そういつて一条はまた銃を突きつけてくる。

秀は反応しない、ボーっとしたまま一条に背中を向けている。

「それでいい、さらば大幢くん」

カチッ

軽い音が秀の後ろでハンマーを引く音が聞こえた。

それと同時に秀は立ち上がった。

「一条博士、全部貴方がやったことだったのですね。」

トーンが一段階下がった少し低い声。

まるで別人みたいに秀は一条を挑発するように話し出した。

「俺たちは人間の究極の秘密、脳について実験をしてた。そこで未来が見える少女が誕生した。貴方はその少女に一番はじめに宣告された。『おじさんの子供、明日死んじゃうんだね』」

予想は的中した。貴方の子供は死んだ」

「違う！殺されたんだ、殺されたんよ！」

「あんたの子供は事故で死んだ。それを少女のせいにして処分を命

じた。けど、そんなこと認められなかった。そこであんたはこの場所
でARISUを暴走させたんだ。俺は止めたのに、あんたは聞か
なかった。」

「うるさい！それがどうした。」

「ここにいるすべての人を殺したのはあんただ！どれだけの命が消
えたと思ってるんだ！たった一人の人間の憎悪が、どれだけの未来
を奪ったとおもってるんだ！」

一条は鳩が豆鉄砲食らったような顔して、たじろぐ。

「でもな、お前らが死ねばすべて終わるんだ。」

そういつて銃を秀の頭に突きつける。

バンッ

銃声が鳴り響く。

でも、打たれたのは秀ではなかった。

一条の右腕、付け根あたりから血が滴り落ちる。

一条は痛さにうなり、銃を落とすとその場にのた打ち回る。

秀はとっさに銃を撃ったほう、すなわり扉のほうをむく。

最終話 脱出

扉のほうには見慣れた人影が立っていた。
少し小さい、まだ若い女性。

「芹澤さん！」

秀はあまりの意外性に驚いた。

しかし、芹澤は何も答えず、倒れた一条のところへ向かう。

「全部聞きました。貴方のせいでみんなが、先輩が……」

さっきは暗くてよく見えなかったが、芹澤は全身、血をあびて真っ赤になっていた。

「やめるんだ、芹澤さん！」

一瞬、芹澤は秀の声で銃を握る手を緩めた。

その瞬間、一条は走り出し、近くにあった機械のボタンを押す。

「もう終わりだ。今ARISUの爆破スイッチをおした。クロックタワーの十二時の鐘が鳴り終わると同時に、この島ごと破壊する。もう終わりだ」

そういつて一条は置いてあった銃を拾い上げ、自ら命を絶った。
部屋に静かな沈黙が流れる。

秀はふと気づいたように雪のところに向かい肩を抱き寄せる。

「雪、大丈夫か？ しっかりしろ」

しかし、返事はなかった。

「ちょっと私に見せて。」

芹澤がテキパキと生命確認をする。

「大丈夫、まだ生きてはいる。でも出血がひどいは、この分じゃあまり持たない。とりあえず船に運びましょう。」

秀たちは雪を一つの部屋に寝かせ、ミカに見守るようにいった。一刻も早くここを抜け出さなくては。

十二時まであと五分、船の操作なんて分からない。それにめの前には大きな門がある。

「芹澤さん、船を動かせるようにしてください。俺は門を開けてくるので。」

「ちょっと、どうやって開けるか分かるの？」

「大丈夫です。記憶が戻りましたから。」

芹澤の目が明るくなった、きっとはしゃいで喜ぼうとしたのだろう。でも、それを必死におさえ船を動かす手掛かりを探しにいった。

秀はいったん船を出ると一条が死んでいるところへ向かった。

ここはARRISUを操作できる場所。当然、門を開けるのもARRISUを使わなくてはいけない。

でも、どうやって？ARRISUは暴走している。

とめるには一条だけが知っている十二桁の愛称番号を入れなくてはならない。

秀は必死で過去の記憶をたどる。

ARRISU、確か一条が作った機械だと聞いている。ARRISUとは子供の名前だとか、あらば番号もARRISUにちなんでは？特に思い当たる節がない、とりあえず十進法じゃ絶対数が足りないので十進方を二進法にかえてははじめを行、次はその行の何番目の数字かに書き換えて、ARRISUを代入する。

『1、1、1001、10、11、11』

ちょうど十二個。早速秀は入力した。

しかし扉は開かない。それどころかこの部屋の扉が死体に壊され、死体がながされるように入ってきた。

もう時間はない、一、二分といったところだろうか。

秀はしょうがなく船に戻った。

「扉のほうは？」

芹澤が不安のそうに聞いてくる。

「すまない、駄目だった。もう、終わりだ……」
そういつて秀はへ垂れ込んでしまった。

「そ、そんな、せっかくこの無敵の戦艦を動かせたのに……」
しばらく沈黙が続く。

それで大きな鐘の音が鳴った。それと同時に秀はひらめいた。

「これの船は戦艦なんだよね。そうだ、強行突破しよう。」

秀は立ち上がる、それと同時に二回目の鐘。

すぐさま操作室に向かう。

行くまでに三回、四回目の鐘になる。

記憶の戻った秀はもはや無敵だった。ありえないスピードで操作を始める。

五回、六回目の鐘。

「よしっ、あとは充電をまつだけ。」

最新型につくりあげた大和の大砲は、いまやレーザー砲にまで進化していた。

七回目

八回目

九回目

エネルギーはやっと半分に足したところことだろうか。

——間に合ってくれ

秀たちはここから思う

十回目

十一回目

・ ・ ・ ・ ・

十二回目

・ ・ ・ ・

最後の鐘がなると同時に島はモクモクと煙を上げ爆発した。
いろいろなものが飛び交う。

そんな中、小さな谷の割れ目から一隻の船が出てきた。
これで悪魔は終わったのだ。

人の屍を踏みつけて生きるような地獄から脱出した。

終章

船は順調に陸へ向かっていた。

秀たちは甲板に出て風を感じている。

「ねえ、秀くん？」

芹澤が少し遠慮してきく。

「なんですか？」

「記憶はもだったんですよね？」

「そうですけど。」

「じゃあ一つ聞きたいことがあるんです。」

「なんですか？」

「実験に使われた少女ってひょっとして……………」

最後のほうは口には出さなかった。

「そうですよ。ミカです。もう少し大人になったらしっかり説明しますよ。そのころには直す方法も分かっているかも知れませんし。」

そういつて少し笑った。

「それともう一つ」

芹澤は照れくさそうに顔を赤くして言う。

「雪さんとはどういう関係だったんですか？」

「ん！婚約者だよ。昔っからのね。」

秀は照れもせずひょうひょうと口にする。

「え、あ、あの…………ごめんなさい。」

「なんで誤るんですか？」

「だって雪さん……………」

「いいんですよ。これは全部事故だった。一人の男が巻き起こした事故。」

そういつて秀は遠くのほうを見つめた。

しばらくして陸に着くと秀たちは軍に看護された。雪も軍の病院で手当を受けたがもう手遅れだった。

秀たちは少し、普通な毎日にとけこめなくて、違和感のなか毎日をおごした。

この事件は当然、報道されることなく闇に消えた。

でも、ミカの姿は帰ってから一度も見た人はいない。

それが不幸の予兆なのかは分からないが、今は確かに平和だ。

この事件を知っている軍の人はみんなこういつていた。

一人の男の悲しみが、不幸な事故をまねいたって。

人間の感情は消えることがない、欲望、憎悪、悲しみ。この世は永遠の感情の輪廻から解き放たれることはない。

終章（後書き）

これでクロックタワーシリーズは終わりです。
今まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4963b/>

クロックタワー2～闇島～

2010年10月10日22時55分発行